

1 3	豊橋	南部中学校	スズキ リュウジ
		名 前	鈴木 隆二
分科会番号	1 2	分科会名	自治的諸活動と生活指導

研究題目

多様な他者と協働し、自己有用感を高める生徒の育成

～中学校第3学年特別活動「私たち3組団は、仲間を超えて“Family”です！」の実践を通して～

研究要項

1 主題設定の理由

グローバル化や人工知能・AIなどの技術革新が進み、社会の変化は複雑で予測困難となってきた。このような社会において、子どもたちはさまざまな変化に主体的に向き合い、他者と協働して解決していく力や、自ら考え、判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められている。学習指導要領前文（平成29年）では、「(前略)一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」と示されている。自己の存在が周囲から認められている、必要とされていると感じる自己有用感は、複雑で変化の激しいこれからの社会において、多様な他者と協力し、自分のよさや可能性をいかしてよりよく生きていくための土台となると考えられる。

「目標に向かって、全力で取り組める団結したクラスにしたいです。」最高学年となった4月、級長に立候補したA子は学級の仲間に思いを語った。この思いはA子だけの思いではなく、多くの生徒が共感するものであった。これまでの先輩たちの姿を想像し、最高学年として後輩たちの手本となり、行事や部活動などのさまざまな場面で後輩たちを引っ張っていきたいという思いをもつ生徒が多かった。5月の体育祭での縦割りの応援団演舞の練習のとき、A子は、後輩に演舞を教える仲間の姿を前に、積極的に後輩と関わることができず、後輩たちをリードすることの難しさを感じていた。A子のように、最高学年としての自覚はあるものの、関わりの少ない後輩のためにどう行動したらよいか具体的に考え、自信をもって実践できる生徒は多くはない。このような生徒たちが、自分たちが最高学年という自覚を常に抱きながら学級の仲間や後輩たちと協力したり、互いのよさを認め合ったりする活動の工夫をすることで、生徒一人一人が自己有用感を高めていくことができるだろうと考えた。

以上のことから、本主題を「多様な他者と協働し、自己有用感を高める生徒の育成」に設定し、研究を進めることにした。

2 研究の計画

(1) 目ざす子ども像

異年齢集団との協働的な活動を通して、自己有用感を高め、主体的に行動する生徒

「自己有用感」とは、人の役に立っている、人から感謝された、人から認められたという感情である。本研究では、「人から認められた」「必要とされている」「人から感謝された」「人の役に立っている」など、他者との関わりを通して自分を価値あるものとして受け入れる感覚であると定義し研究を進めていく。

また、「主体的に行動する」とは、人任せにせず、自分事として考え、自信をもって行動する生徒と考える。

(2) 仮説

異年齢集団による交流を繰り返し行ったり、後輩たちとの関わりについて考えたりする場を設定し、活動後の振り返り活動を充実させれば、自己有用感が高まり、主体的に行動することができるだろう。

(3) てだて

ア てだて① 異年齢集団による交流の場の工夫

本校の学校行事では、異年齢集団による交流が取り入れられている。3年生が下級生を引っ張って行事を運営することが伝統として受け継がれている。しかし、学校行事以外の場面で異年齢集団による交流の場面はほとんどなく、後輩と共に活動する機会は少ない。1, 2年生の立場からすれば3年生の生徒はどの生徒も最高学年の先輩であり、誰もが学校生活を引っ張る存在と認識されている。だからこそ、異年齢集団による交流の場を繰り返し設定することで、本学級の生徒全員が後輩のために行動しようと

いう意識をもち、必然的に多様な他者と協働する場面が設定できる。本校では、毎日、朝の活動の時間（8:15～8:35）が設定されており、行事でなくても短時間の活動を繰り返し行うことができる【資料1】。また、異年齢集団による交流を行う際には、少人数のグループを編成することで、一人一人が最高学年としての自覚をもち、後輩たちとの関わり方を考えることができるだろう。さらに、交流を進めるなかで1、2年生が感じた思いや願いを本学級の生徒にフィードバックすることで、後輩たちの思いに応えようと考え、より主体的に行動することができるだろうと考えた。

【資料1 南部中学校の日課】

時限	時間	月	火	水	木	金
	8:05	職員・学年打ち合わせ			なし	打合せ
	8:15～8:35	学び (朝読書)	南丸 生徒会	心 保健安全	学び (お話タイム)	わくわく

イ てだて② 活動の目的を明確にする学級会の設定

異年齢集団による交流を進めるうえで、後輩たちとの関わり方について具体的に考えたり、活動の目的を明確にしたりすることで、学級の全員が自分事として考え、活動に主体的に参画するだろう。そのために、学級会「3-3 閣議」を設定し、交流の際に困ったことやうまくいかなかったことを共有し、その後の活動にいかしたり、活動の方向性を決定したりする場を設ける。

ウ てだて③ 活動の振り返りとそれをいかした個人目標の充実

異年齢集団による交流を行った後に、自分自身の行動を振り返る場を充実させる。後輩たちに対して自分がどのように関わったか、相手を意識して行動できたかを自己評価していく。その際、「後輩との関わり度」としてパーセンテージを用いて自身の行動を数値化する。また、その振り返りを今後の活動にいかすことができるように、個人目標を考える時間を設ける。

(4) 検証方法（抽出生徒の設定）

本研究を進めるにあたって、A子の変容を追うことで仮説の検証を進めていく。A子は、3年生になって1、2年時では経験のない級長に立候補した。級長として、「目標に向かって、全力で取り組める団結したクラスにしたいです。」と決意を述べ、学級の生徒から共感を得た【資料2】。5月に行ったアンケートでは、「自分のクラスは仲の良いクラスだと思う」「学級内にはいろいろな活動に誘ってくれる友人がいる」などの学級との関係については、前向きな回答をしている。しかし、「自分もクラスの活動に貢献していると思う」「勉強や運動等で友人から認められていると思う」などの項目では、高い得点が得られていない。このことから、自分が人の役に立っている、人から感謝された、人から認められたという感情を得た場面が多くないのだろうと考えた。さらに、体育祭に向けた縦割り活動（団活動）の練習でも、A子の自信のなさを感じる場面が見られた。級長として学級内ではリーダーシップを発揮しようとする姿が見られたものの、体育祭での応援合戦の演舞発表に向けた練習では、積極的に後輩と関わる様子は見られず、活動する集団の後ろで見守ることが多かった【資料3】。その日のA子の生活日記には、【資料4】のような記載があり、最高学年としての自覚はあるものの、関わりの少ない後輩のためにどう行動したらよいか具体的に考え、自信をもって実践するまでには至っていない。本実践を通して、目標に向かって頑張ろうとするA子の前向きさをいかしながら、友達から認められ、仲間や後輩たちの役に立ったと感じる場面を自信にし、自己有用感を高めて、主体的に取り組むことを期待する。

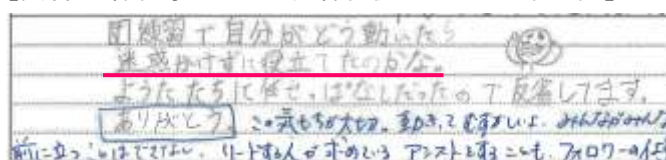
【資料2 級長に立候補し、決意表明をするA子】



【資料3 体育祭の団練習でのA子の様子】



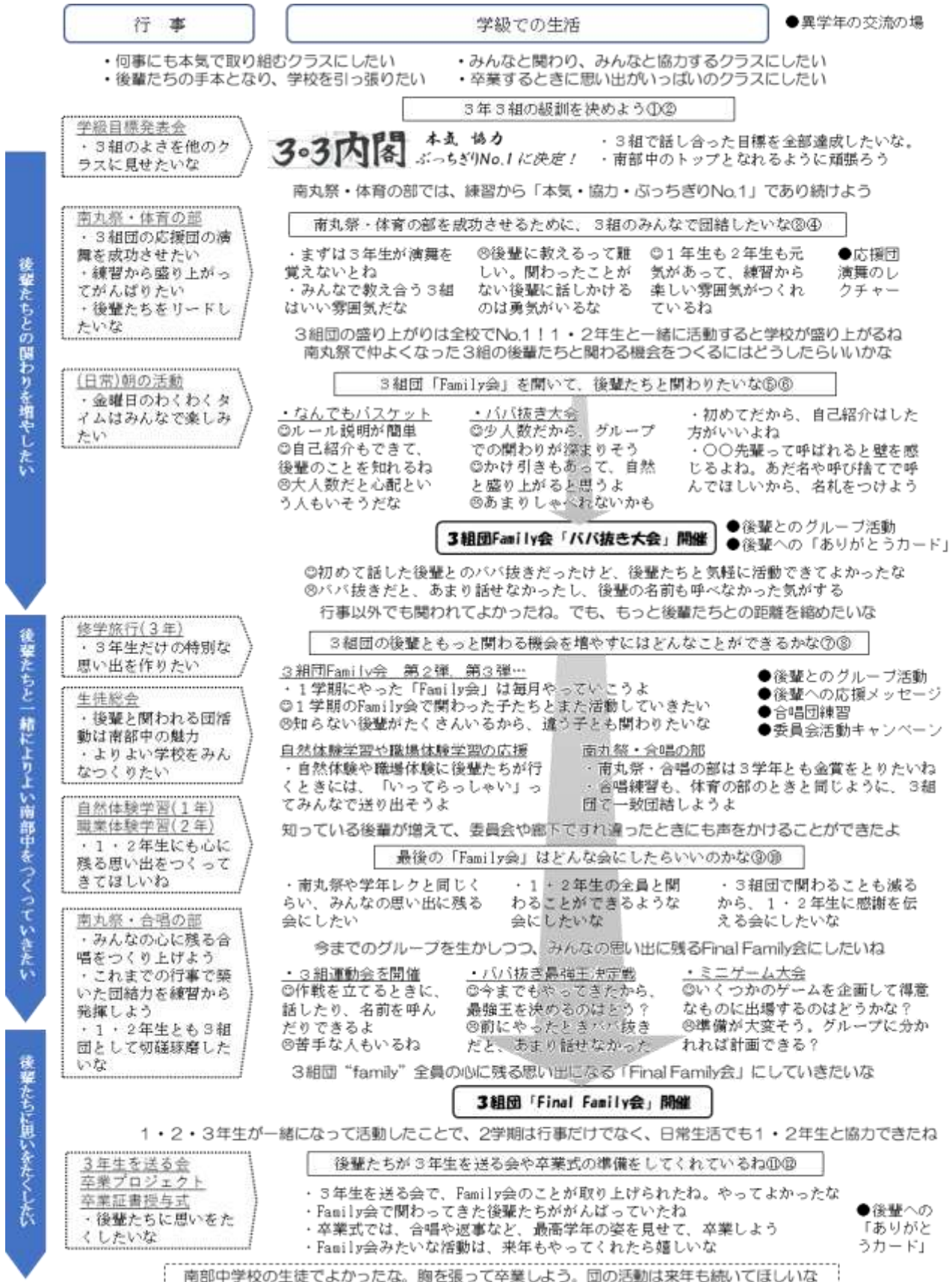
【資料4 体育祭に向けた団練習後のA子の生活日記】



(5) 題材構想図

【資料5】のように題材構想し、研究を進めていく。

【資料5 題材構想図】



4 研究の結果と考察

(1) てだて① 異年齢集団による交流の場の工夫

ア 3組団の後輩たちと関わりたいという思いを実現させた第1回 Family 会「ババ抜き大会」

3組団の団長を務めた生徒が、「僕たち3組団は、仲間を超えて『Family』です。」という思いを語って体育祭を締めくくった。体育祭後、その生徒は「気軽に話せる先輩後輩になるために企画を開きたい」と生活日記に綴った。この思いを学級会で取り上げ、朝の活動の時間を活用して、異年齢集団による交流の場「3組団 Family 会」を開催することになった【資料6】。

初めての異年齢集団による交流の場として何をしたらよいかを学級会で話し合い、誰もがルールを知っているトランプの「ババ抜き」をすることに決まった。1, 2, 3年生が混在する6人程度のグループを編成し、6班ずつ3つの会場に分かれて活動を進めた【資料7】。それにより、一人一人が後輩たちとの関わり方を考える必然性が生まれ、どのグループでも3年生が最高学年としての自覚をもち、1, 2年生に声をかけながら活動を進めることができた。

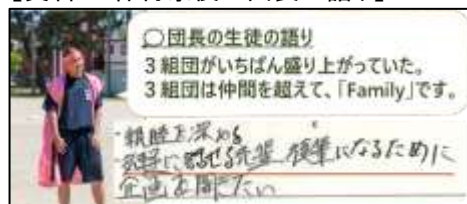
イ 第1回 Family 会の反省を生かした第2回 Family 会「ボードゲームで交流しよう」

第1回 Family 会は、時間いっぱいまで何度も「ババ抜き」をし、活動を楽しむ様子が見られた。しかし、ゲームに熱中していると、互いの名前を呼び合いながら会話をする場面がほとんどなかったことが反省として挙げられた【資料8】。このような反省をいかし、第2回 Family 会では、グループのメンバーを同じにして、全員と会話することを目標にして活動内容を検討した。そこで、第2回 Family 会は、グループごとにボードゲームをやることになった。活動時のA子は、兄弟に話をするように、1, 2年生にカードゲームのルールを丁寧に説明していた。【資料9】。

ウ さらに仲を深める Big Family 会を企画しよう

少人数での異年齢集団による交流を繰り返したことにより、廊下ですれ違ったときに挨拶をしたり、一緒に活動した後輩にメッセージカードを渡したりすることも日常の中で見られる光景となった。後輩との仲を深めたい、さらに多くの人たちとの交流の輪を広げたいという思いから、3組団全員で活動する「Big Family 会」を企画することにした。これまで活動してきたグループを生かしつつ、新たな人間関係が生まれるように、活動時間も朝の活動ではなく、学活の時間を活用することにした。学級会での話し合いの結果、リレーと綱引きを活動の柱とすることに決定したが、1, 2年生が Big Family 会をより楽しめるようにプログラムを作ることや、グループごとにはちまきを着用することなど、活動をより充実させるアイデアも取り入れることになった。A子は、グループの代表として、開会式で「今日はみんなで応援し合って、今まででいちばん盛り上がる Family 会にしましょう」と後輩たちに語った。また、1, 2年生にリレーの走順を確認したり、円陣を組みように声をかけて自らがグループを盛り上げたりする姿が見られた【資料10】。また、学年対抗で綱引きを行ったときには、3年生が競技に参加するときに、3年生の姿を見て、1, 2年生が率先して進行の役割を担う場面もあった。3年生が主体となって進めた企画に、1, 2年生も参画していることがわかる【資料11】。

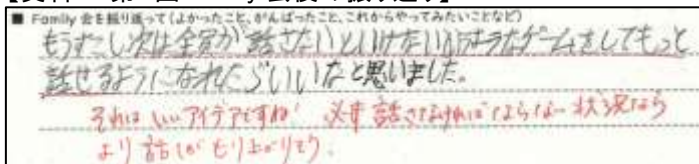
【資料6 体育祭後の団長の語り】



【資料7 第1回 Family 会の様子】



【資料8 第1回 Family 会後の振り返り】



【資料9 第2回 Family 会の様子】



【資料10 円陣を組み、号令をかけるA子】



【資料11 3年生に代わって進行役を担う1年生】



(2) てだて② 活動の目的を明確にする学級会の設定

ア 第1回 Family 会「ババ抜き大会」に向けた学級会

異年齢集団による交流「第1回 Family 会」を行うにあたり、何をしたらよいかを話し合うため、「後輩たちと関わる Family 会を開くなら何をするか」という議題で学級会を開いた。話し合いを進める中で、名前を知らない後輩たちとの信頼関係を築くために、互いをより知ることができる活動内容にしようとする意見が多く出てきた。「大人数の前で話すことが苦手という人もいると思うから、はじめは小グループでやれるゲームの方がよい」という意見には多くの生徒が共感し、誰もがルールを知っているババ抜きをすることになった【資料 12, 13】。活動内容のよさや課題を出し合い、それぞれの案を比べ合ったことで、関わる人数は多くないものの、安心して交流に参加し、関わりを深めようという異年齢集団による交流の目的を再確認することができた。

【資料 12 第1回 Family 会に向けた学級会の板書の一部】



【資料 13 学級会 1002 の授業記録】

～活動内容について比べ合う場面～

- C10: まだ名前を知らない後輩ばかりだから、自己紹介をして、名前を知ることからやっていきたいです。
- C11: 初めて関わる子たちもいるから、「なんでもバスケット」なら自己紹介にもなると思うし、ルール説明も簡単に済むと思います。
- C12: ババ抜きもほとんどの人がルールを知っているから、すぐにできると思います。
- C13: ババ抜きのように少人数の方が、関わりが深められるような気がします。
- C14: なんでもバスケットもいいけど、あまり知らない大人数の前で話すことが苦手という人もいると思うから、はじめは小グループでやれるゲームの方がいいと思います
- C15: C14に賛成で、少人数で自己紹介をして、少しずつ関わる人を増やしていった方がいいと思います。

イ Big Family 会をどのような会にしたいか

異年齢集団による交流を少人数で繰り返したことで、互いの名前を覚え、学級の生徒たちは、新たな人間関係が構築されたことに喜びを感じていた。後輩との仲を深めたい、さらに多くの人たちとの交流の輪を広げたいという思いから、3組団全員で活動する交流の場「Big Family 会」を企画することにした。Big Family 会をどのような会にしたいかを話し合う学級会では、これまでの少人数での交流を生かしたグループでの活動にすべきか、1～3年生全員での活動にすべきかが議論の中心となった。それぞれのよさを語っているものの、どこか企画者としての自分本位の意見が多かったことから、自分たちの思いだけでなく、後輩たちの思いにも目を向けられるように、1, 2年生から調査した Family 会についての意見や思いを提示した【資料 14】。自分たちは異年齢集団による交流を楽しみ、新しい人間関係が構築されたことに喜びを感じていた生徒たちは、1, 2年生の中には仲が深まったと思うかという問いに対し、肯定的な意見をもっていない人がいることに驚いた。そこで、Big Family 会では、先輩後輩の仲が深まったと1, 2年生に感じてもらうことを目的とすることを確認し、活動の計画を進めることになった。

ウ Big Family 会では何をしたらよいか

先輩後輩の仲をもっと深められるような Big Family 会にするために具体的に何をしたらよいかを話し合う学級会を行った。生徒たちはどの案もよいと感じており、折り合いをつけて活動内容を決定する場面で、話し合いが停滞した。そこで、再度【資料 14】の1, 2年生の思いを提示し、活動の目的を再確認することにした【資料 15】。活動をしている具体的な場面を連想しながら話し合いを進めたことで、学級全体で活動の方向性を定めることができただけでなく、後輩たちとどのように接するべきか、具体的な行動目標をもつこともできた。

【資料 14 Family 会に対する後輩たちの意見】



【資料 15 学級会 1011 の授業記録】

～どの案も魅力を感じ、決めきれない場面～

- C24: リレーは走っている人を応援できることもいいと思います。
- 司会: C24みたいに、仲が深まりそうな場面があれば教えてください。
- C25: しっぽとりも、協力するという面では、作戦を立てられるからよさそう。
- C26: 綱引きは、全員で一つのことをやるわけだから、一体感が生まれると思います。
- C: (決めきれない雰囲気広がる)
- T: どれもいい案って感じだね？何のためにやるの？
- (資料14を示しながら)先輩、後輩の仲が深まったと言っている1年生が少ないよね。想像してごらん、1年生の顔浮かんでる？一緒に活動してきた1年生と、これだったらより仲よくなれると思うものはどれだろう？
- C27: 想像したときに、リレーでバトンを渡すときに笑顔だった。
- C28: 僕もリレーで想像したんだけど、自分がバトンを持っています。後輩に渡します、そのときの気持ちは一つ、がんばれだと思う。応援の気持ちが団結につながると思う。
- C29: リレーは、いま推している人が続いているから、リレーはやって、時間調整がしやすいものをもう一つやるのはどうですか？
- 司会: では、リレーはやる方向で進めてもよいですか？

(3) てだて③ 活動の振り返りとそれをいかした個人目標の充実

異年齢集団による交流を行った後に、自分自身の行動を振り返り場とし、「後輩との関わり度」を、パーセンテージを用いて表現することにし、教室に掲示した。A子は、体育祭では後輩と積極的に関わることがなく、3年生と過ごす時間が長かったことから関わり度を30%とした。その後は、Family会を行うごとに関わり度の数値は上昇していった【資料16】。互いに名前呼び合ったり、後輩たちが楽しめそうなゲームを考えたりした経験から、自分から後輩たちへ声をかける機会が増えたと話すこともあった。また、これらの振り返りを生かし、次の活動ではどんなことに力を入れて取り組むか、個人目標を立てた。Big Family会を行うときには、A子は「盛り上げたり、大きい声を出したりするのは得意じゃないけど、せめてペアの二人に話しかけるのはもちろん、(中略)応援したり、助けたりすることは積極的に行いたい」と述べた【資料17】。これまでの後輩との関わりをもとに、仲間のため、後輩のために役に立ちたいという思いを高めることができた。

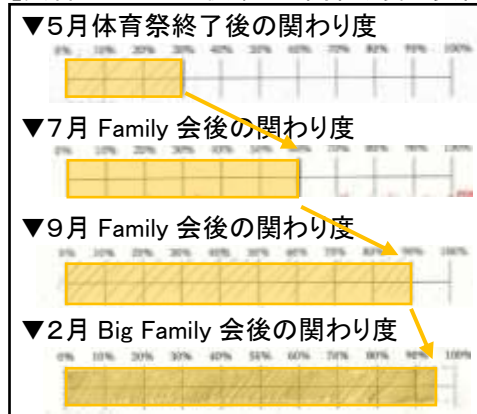
5 研究のまとめと今後の課題

5月と2月に行ったアンケートの結果を比べると、「友達から認められている」と答える生徒が学級全体の80%まで増えていることがわかる。また、「クラスの活動に貢献していると思う」と答える生徒も増加している。このことから、異年齢集団による交流による関わりを通して、周囲から必要とされ、人の役に立ったと感じる生徒が多くなることがわかる。さらに、学級のほとんどの生徒が「クラスの行事に参加したり、活動したりするのは楽しい」と感じており、一人一人が自分事として考えて活動し、主体的に行動することができたと考えられる【資料18】。

年度初めに後輩との関わり方に不安を抱えていたA子は、1年間の異年齢集団による交流を振り返り、「1、2年生、そして3年3組への信頼がより強くなって」と述べた。活動を進めるなかでA子が仲間や後輩たちの役に立ったと感じた場面を自信にして、自己有用感を高めることができた。さらに、合唱コンクールでは、実行副委員長に立候補し、学校生活のさまざまな場面で、主体的に行動する姿が見られるようになった【資料19】。

本学級の生徒が卒業した後に行われた生徒会役員選挙では、異年齢集団による交流で共に活動してきた1、2年生が生徒会役員に立候補した。立会演説会で、「今年、3組団が行ってきたFamily会のような団活動を継続して、全校で団結する場面を増やしていきたい」と述べる立候補者が複数名いた。生徒たちにとって、多様な他者と協働することができる異年齢集団による交流が、より学校生活をより豊かなものにすると感じていることがわかった。しかし、学級や学年によって実態が違ったり、行事との兼ね合いにより交流の場や学級会の時間が確保できなかったりするなど、課題も多く残っている。それらを踏まえ、これから本校の教員や生徒たちに本実践の方法を伝え、実践を持続可能なものにしていく環境を整えていく必要がある。

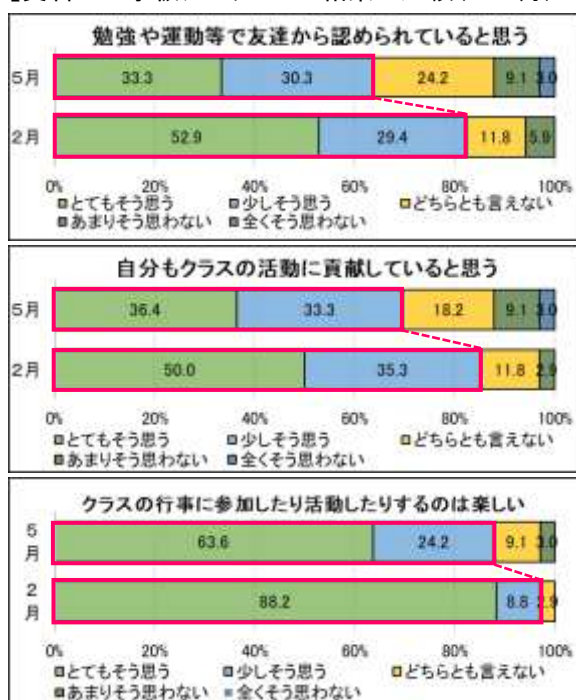
【資料16 A子の後輩との関わり度の変容】



【資料17 A子のがんばりたいこと】

Big Family会でわたしががんばりたいこと
 盛り上げたり、大きい声を出したりするのは得意じゃないけど、2人に話しかけるのはもちろん、1、2年生たちを応援したり、困った時に助けたりするのは、積極的にしたいです。あと、おもしろいゲームを考えたり、

【資料18 学級アンケートの結果の比較(5・2月)】



【資料19 年度末のA子の振り返り】

この一年間、行事の団活動やFamily会を続けてきて、「がんばったこと」や「成長したこと」はなんですか？
 C子さんのまとめの役を任せてもらって、最初のFamily会は前日から1週間前から準備して、全部3回、Family会を通して、1、2年生、そして3年3組への信頼がより強くなって、Big Family会では悔いなく、また来年はもっと頑張りたいです。また、1年間、後輩たちと一緒に、ひっぱり続け、集団をまとめる責任も負っているから、後輩たちにも、自分1人おもしろい、おもしろい